

今川氏真 『百首・法楽百首』 紹介と翻刻

小 大 土 東 古  
山 石 井 野 川  
順 華 萌 彩  
子 央 菜 空 佳

はじめに

今川氏真（二五三八〜一六一四）は、文芸に打ち込み、歌人としても知られる戦国大名である。駿河という地は代々、文芸への意欲が高く、多くの公家や連歌師やその地を訪れた。氏真の父・義元は、兄たちの死去により家督を継ぐため還俗するまで僧籍にあつたこともあり、漢詩や和漢聯句を好んでいたが、氏真は和歌を好み多くの詠歌を残している。

氏真の和歌に関する主な研究を挙げると、井上宗雄『中世歌壇史の研究室町後期』（明治書院・初版一九七二年・改訂新版一九八七年）、同「今川氏とその文芸」（『今川氏と観泉寺』（吉川弘文館・一九七四年）第二部第三章）、同「今川氏真研究補遺」（『中世歌壇と歌人伝の研究』（笠間書院・二〇〇七年）付章3）、米原正義『戦国武士と文芸の研究』（桜楓社・一九七六年）第六章第四節「氏真およびその他の文芸」、小川剛生「武士はなぜ歌を詠むか——鎌倉將軍から戦国大名まで」（角川学芸出版・二〇〇八年）第四章「流浪の歌道師範——冷泉為和の見た戦国大名」、同「文学活動に長い伝統と実績を持つ家柄」（『今川氏研究の最前線——ここまでわかった「東海の大大名」の実像』（洋泉社、二〇一七年）所収）などがある。歌人・氏真を取り巻く人々との交流や背景が考究されてきたのであるが、こうした研究を可能にしたのは、氏真の詠歌が戦国大名の和歌としては、豊富に残されていることがある。

これまで知られている氏真の詠草は、基本的に『新編私家集大成』と『今川氏と観泉寺』（吉川弘文館・一九七四年）「今川氏真全歌集」に翻刻が収められている。

各詠草の翻刻の収載状況についてまとめておく。

・新編私家集大成

氏真Ⅰ 『今川氏真詠草』（国立公文書館内閣文庫 201/600） ※『今川氏と観泉寺』にも翻刻所収

氏真Ⅱ 『詠草中』（井上宗雄旧蔵、現在所蔵不明） ※『今川氏と観泉寺』にも翻刻所収

氏真Ⅲ 『草庵中』（早稲田大学図書館へ 4/8163）

・『今川氏と観泉寺』（吉川弘文館・一九七四年）「今川氏真全歌集」

百首 観泉寺蔵（自筆）・彰考館蔵（口 6・06975）

法楽百首 宮城県図書館伊達文庫蔵（伊 911・268・29、孤本）

百首イ 国立公文書館内閣文庫蔵『賜蘆拾葉』(217/11) 所収(孤本)

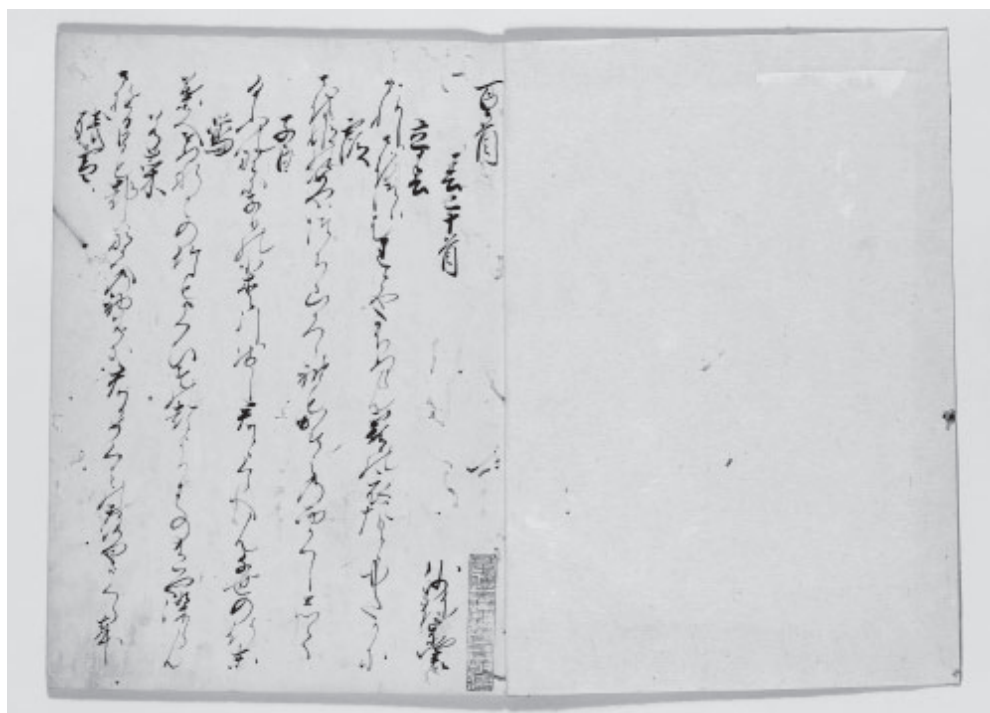
百首ロ 同右

詠十五首和歌 早稲田大学図書館「実澄氏康氏真点取和歌」(へ4/5585)

『今川氏と観泉寺』には、他にも「作品拾遺」として、古書店の目録に写真が掲載されているものや、短冊詠草の翻刻が収められている。その後に発見された資料については、小山「今川氏真と和歌——天正三年『今川氏真詠草』をめぐる——」(『女子大國文』168、二〇二一年一月)に簡略ではあるがまとめた。

小稿で紹介するのは、新出の氏真詠草である。慶應義塾大学教授の小川剛生氏からご教示を受け、今回紹介するにあたって小川氏から助言を頂いた。小川氏に心より御礼を申し上げます。

一、書誌・内容



本書の書誌を示す。

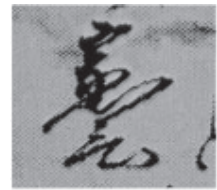
- ・慶應義塾大学三田メディアセンター所蔵（準貴重書 JL@2A@1394）
- ・館整理書名 「百首 法楽百首」
- ・装丁 袋綴一冊
- ・法量 縦二六・二cm、横一九・五cm。
- ・表紙 柿渋無地の紙表紙。
- ・外題 ナシ
- ・内題 「百首／春二十首 沙弥宗闇」（端題）
- ・本文料紙 楮紙
- ・見返し 本文共紙
- ・丁数 墨付一七丁。一面二三行、和歌一首一行書き。
- ・奥書 ナシ
- ・備考 最終丁に反町茂雄の蔵書印「月明荘」（朱・陽角）。補修跡アリ。

本書は二種の百首歌を合写する（A百首・B百首と仮称する）。A百首は堀河百首題で、春二十首・夏十五首・秋二十首・冬十五首・恋十首・雑二十首。B百首は、百首題がそのまま一致する例は管見に入らない。春二十首・夏十五首・秋二十首・冬十五首・恋十五首・雑十五首で、単題・結題が混ざるが、珍しい題も含まれる。

詠作年次は不明であるが、冒頭に「沙弥宗閻」という署名がある。氏真の「宗閻」署名初見は天正三年（一五七五）七月十九日である（参考・長谷川幸一「今川氏真の「宗閻」署名初見史料」『戦国史研究』60、二〇一〇年九月）。本書も、氏真が出家して宗閻と号した天正三年、三十八歳以後の詠作ということは判明するが、成立時期の下限は、氏真が没した慶長十九年（一六一五）十二月二十八日としか分からない。これは、先掲の『今川氏と観泉寺』所収の他の百首歌四種もすべて同様である。

本書に収められる二百首はいずれも、新編国歌大観・新編私家集大成、および『今川氏と観泉寺』所収「今川氏真全歌集」に見えない新出和歌である。また反町茂雄の蔵書印を持つが、『弘文荘待賈目録』に記載されていない。なお慶應義塾大学メディアセンターによる書誌には「自筆」と記されている。『今川氏と観泉寺』所収の氏真自筆短冊や、Xの【公式】曹洞宗宝珠山観泉寺「二〇二三年一月二十三日投稿（<https://x.com/kansenjimagawa/status/1671028671661088768/photo/1>、二〇二五年十二月二十八日最終閲覧）に掲載されている自筆短冊の写真的筆跡などと比較しても、氏真自筆と認めうると判断される。以下、『今川氏と観泉寺』に収められた氏真自筆短冊の筆跡と、本書の筆跡の比較である。短冊に付した番号は『今川氏と観泉寺』所収「今川氏真全歌集」に依る。本書の歌番号は、翻刻の歌番号に準じている。掲出した例は二字以上にわたるものに限った。

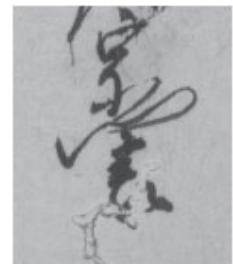
【署名】



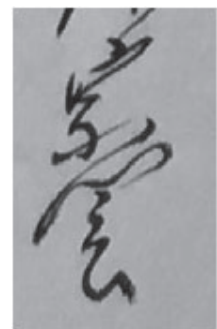
短冊（遺 18）



短冊（遺 19）



本書 A 百首

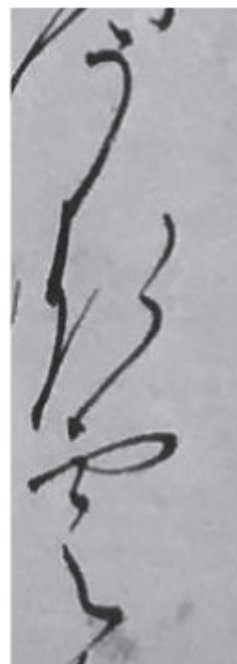


本書 B 百首

【うき雲】



短冊（遺 18）

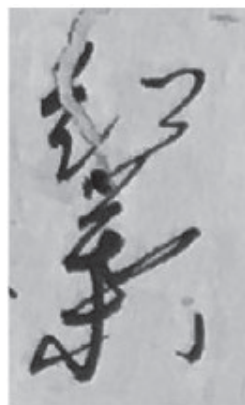


本書 50 番歌

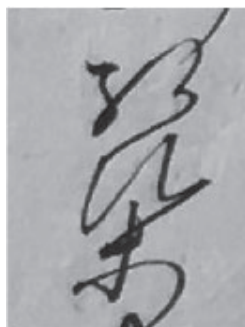
【紅葉】



短冊（遺 19）

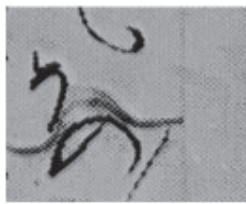


本書 54 番詞書

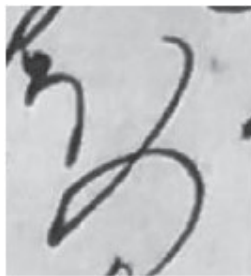


本書 54 番歌

【ほの】



短冊（遺 18）



本書 110 番歌



本書 125 番歌

（以上、文責小山）

## 二、翻刻

### 【凡例】

- ・歌頭に、1〜200までの通し番号を付した。
- ・漢字は通行の字体に改めた。
- ・見せ消ちされている字はへ〜に入れて示した。
- ・補入記号は「○」で示し、補入されている字を傍書した。
- ・丁移りは「┌」で示し、丁数を（ ）に入れて示した。
- ・虫損などで判読できない箇所は「□」で示し、推測される本文を（ ）に入れて傍書した。
- ・難読漢字には、（ ）内にカタカナで読みを示して傍書した。
- ・翻刻は小山・大石・土井・東野・古川の五名が分担して行い、相互に本文を確認した。

### 【本文】

百首

春二十首

沙弥宗閻

立春

1 うれしきをつゝむ春とやたちぬらん霞の衣たもとゆたかに

霞

2 さを姫の姿やいつち山かつら袖もかすみの面かくしして

子日

3 けふの野に子日の小松引残し君とくらへん千世の行末

鶯

4 葉かへせぬ軒はの竹もうくひすの声より春の色や染らん

若菜

5 さゆる日も都は野への初若な君かめくみの露やかくらむ

残雪 ─ (1才)

6 待遠き花をみ雪の消かてに匂ふ計の杉のした路

梅

かね

呼子鳥

7 夕月夜梅のしつ枝をもる影にうつるはみゆる袖の上か

な

14 思ひやるたつきもなしやよふこ鳥さそふ夢路は覚る枕  
に

柳

苗代

8 玉すたれ翠も深くかけてけり朝夕露の青柳のいと

早蕨

15 苗代の水の下もえ影すみてしめにそよめく秋風の声

9 昔誰かゆかりの色のさはらひを今もかたみにつみても

つらん

16 かけろふのあるかなきかの野へも今花にうらこすつほ  
董かな

春雨

杜若

10 山里の心は秋の夕くれに鳩なきくらす春雨の空

桜

17 やり水に立そふあやめ香をそへて猶色ふかきかきつはた〈花の色〉  
哉

11 峰も尾も盛と見えて久方の雲井にまよふ花のしら雪

春駒

藤

12 道芝に散しく花の波たてゝ行やかた野のよつ白の駒

「(1ウ)

18 そなれ松ねやあらはれん藤波にゆられて浮ふ池の中嶋  
款冬 「(2才)

19 深みとり秋の朽葉も一本の籬にこもる山ふきの花

帰雁

三月尽

13 くらへみていつくの花のまさるそと閑にかへれ春の雁

20 月もなく花も青葉のけふの暮哀うき世のめくる春かな

夏十五首

更衣

21 久方の空もみとりに立かへてひとへにけふの袖そ涼し  
き

卯花

22 卯花をみかく朝日の白露は雪けに落る雫なりけり

葵

23 こと茂き世にも二葉の葵草そのかみかきをかけて知哉

郭公

24 小夜枕それと計のほとゝきすあたねに又や明しはてま  
し

菖蒲 「(2ウ)

25 名にしほふよとのゝあやめかりそめにきても枕の妻と

成らん

早苗

26 湊入るふか田の早苗取あへすほなみをかくす賤か袖か  
な

照射

27 妻に迷ふ闇のむくひをともしさし待あかさるゝ鹿の哀

さ

五月雨

28 晴まさへ人は問ひこぬ五月雨の音信絶ぬ軒の玉水

廬橘

29 風ふれてうきも忘るゝ橘を昔おもふと誰かいひけむ

蛭

30 流れてもおもひやたえず行水に浮て蛭のもえ明すらむ

蚊遣火

31 賤の屋の数ならねども数くゝにうさをみせたる夜はの  
蚊遣火 「(3オ)

蓮

32 かへりみる哀も深き池水にさけるはちすの浮世をそ思

ふ

氷室

33 代々をへて消ぬためしのひむろ山風も都に吹送るらし

泉

34 玉と散る泉のみ草風立てそよや氷を手にもすふ也

六月祓

35 濁れるもたゝよふ波のみそき河何とたゝすの神にと  
はゝや

秋二十首

立秋

36 空に立秋の朝けのをのつから草木より先袖の初かせ

七夕

37 物思はぬ契にうつれ七夕もまことをつくす浮世ならね  
はー(3ウ)

萩

38 枝わきてさけるさかざる萩か花織みたしたる錦なりけ  
り

女郎花

39 ましはるになかめそひぬる女郎花深き心の色やつくら  
ん

薄

40 穂に出る時ともまたし糸薄秋もあさけの露のけしきは

苺萱

41 夕されは千種をしまみしほれつゝさひしさ残野へのか  
るかや

蘭

42 思へとや植置つらむ藤はかま誰かふる郷の秋のかたみ  
に

萩

43 風にたに問はれぬ庭の萩の葉に余る思ひや登る夕露  
雁ー(4才)

44 何れそと声も姿もなかへぬ<sup>め</sup>わふ雲井の雁に小田の雁

金

鹿

45 月遅き尾上の雲の境より先立出るさをしかの声

露

46 何れをか思ひ分らん百草になへてはむすふ野への白露  
霧

47 秋の色ほのめく山のうすくこく日影へたつる天のむら

霧

槿

48 たのしむもたゝ朝かほの世中を花のうはさにみるそは

かなき

駒迎

49 東路や君か御かけに逢坂の駒は今夜の月やひくらむ

月

50 世の外にさそふか月の行空は心に向ふうき雲もなし

「(4ウ)

擣衣

51 誰か里のうすき衣をうつたへに身にしむ槌の響なるら

ん

虫

52 枕までとをる夜寒の蛩壁のあなたに鳴音なれとも

菊

53 つほみより咲てうつろふ露霜の籬の菊は幾盛かも

紅葉

54 きし方に此ころ秋やかへる山紅葉の錦おりもたかへす

九月尽

55 秋たてはうき夕暮といとはせて過るも悲し長月の空

冬十五首

初冬

56 山はさそ嵐吹〇らむ都たに冬たちわたる雲のけしきに

「(5オ)

時雨

57 曇りくる音を潮にたてそへて浦廻りする夕時雨かな

霜

58 せめて思ふ秋の名残の色をたに埋みはてたる霜の道芝

雪

59 遠山をみるそはけしき庭もせの雪閑なる窓のうちかな

霰

60 はらくと降や衣のうらまてもさなからみかく玉あら

れ哉

寒蘆

61 湊吹風の音より枯そめて残るもおるゝ蘆のむら立

千鳥

62 思ひやる清き河原かさよ千鳥遠音に耳をすましぬる哉

氷「(5ウ)

63 井せきより浅きし水の音もなしかに氷の楔うつらむ

水鳥

恋十首

64 影までも青葉紅葉をこき交てみな遊ひする池の鴛鴨

神楽

初恋

71 露よなど手折らぬ袖をしほるらむまた初花のよそめ計

に

65 あめにます神やくはふるあさくらの声すみのほる玉敷

の庭

忍恋

72 しるへする心のみちにまかせ得ぬ身の迷ひをも誰に語

網代

らん

66 紅の落葉の波もひをふれは網代の床にあられをそしく

炭竈

不遇恋

73 なからへて哀つれなき命かな人の心にいつならひけん

67 住侘る思ひの煙すみかまに立そひてうき大原の山

鷹狩

初会恋

74 いかならむ後の心のいつしかに又物思ふ新まくらかな

68 野も山もしらぬ巢鷹の手習に鳥や刷羽を教へ初らん

炬火

後朝恋

75 あひみしも悔しきはかり成ぬるか今朝は我かの心まと

69 夜を寒みかさぬる柴の煙より春をもたつる埋火のもと

「(6才)

ひに「(6ウ)

逢不遇恋

除夜

76 さめやらでうつゝに身をもせむ⑧哉あたにむすひし夢

70 一とせをあたに過ぎて今夜はとことよりはりなくも惜ま

るゝかな

の名残の

旅恋

77 明て発暮て宿とふ旅衣出ても恋のみをしはなれぬ

思

78 下むせふ胸の煙はつれなくて人にしられぬ我やけなま

し

片思

79 いかにくき人の心そさきの世の我もうらめし思ひしら

れて

恨

80 数ならぬ身をは置つゝともすれは人のつゝきと恨ける

哉

雑二十首

暁

81 有明の梅の梢は閑けきにねくらなからや鳥鳴らむ

┌ (7才)

松

82 嶺へ尾へさかふる千々の枝毎に君か齡を松やこむらん

竹

83 力をは風こそ尽せなよ竹の心長くも打なひくなり

苔

84 心なき世々のうつほ木春秋を宿かる苔のよそに知らん

鶴

85 千年をはひなにゆつりて老鶴の何をか夜の空にわふら

ん

山

86 情なき物とはいはし打むかふ折にふれたる山のけしき

を

河

87 山はたゝ花をそ見する芳野川時にうつろふ水の上かな

野 ┌ (7ウ)

88 色くくの秋の花にも数そへて冬は小鳥のゑとる野へか

な

関

89 めくりてはきの関守かゆるしなく立迷ふ世のならひな

るらん

橋

90 求入る山路あやうき丸木橋身や捨難き世をはすてゝも

海路

91 一筋の道はさたかにありそ海や世をうき舟も行通ふら  
ん

旅

92 見せはやな古郷人に海山の遠につけても替るけしきを

別

93 残し置心にかふるおも影は忘れすつれよ行末の空

山家

94 音つるゝ軒の山松みても猶さひしき数のまさ木ちる暮

「(8才)

田家

95 大けなく千町の水のかけはかりむすへる庵の庭と見る

哉

懐旧

96 かはり行世をし思へは年波の数さへうさをくはへぬる

かな

夢

97 思ふ事しはしもみえよ覚て後はかなき夢の同世中

無常

98 あふきみる高木の花も散事の数には何かもりの下露  
述懐

99 うらやむもうらやまるゝも同身のうき世に廻るすさひ

成けり

祝

100 跡たるゝ名も安国の安き世の君に二たひ神も逢らむ

「(8ウ)

(一枚白紙) 「

法楽百首

春二十首

立春

101 年くの春日はかねてしるけれど立てふけふの珍きか

な

鶯告春

102 春きぬと松立門を明ほのにあるしかほなる鶯のこゑ

山海霞

103 さし昇る朝日の山の影うすくさゝ浪かすむにほの海つ  
ら

沢若菜

104 下もえに氷やとくる沢水の打出るけふは若なつむ也

野子曰

105 幾春か祝ふ千とせに此のへの子曰の松は万代も経ん

隣軒梅 「(9才)

106 うつりぬる心に花の陰しめてよその梢も宿の梅が枝

梅薰袖

107 袖とめて誰かゆかりかも梅の花身をしはなれぬ庭の春

かせ

春月

108 鐘ひゝくそなたは山と心あての霞はかりに月そうかへ  
る

若草

109 氷るし真沙地しめる朝露の光もしたにめくむ若草

夕帰雁

110 行舟のほのかにみえて夕霞かすまぬ声に帰る雁かね

雨催花

111 常磐木の翠の山も今日さらに色ある雨や花の下染

交花

112 雲を分雲にそのほる山さくら花や心の橋となるらむ

「(9ウ)

花遅速

113 世にみてる雪と花との跡とふや深山桜の情なるらむ

春曙

114 いとへとも隔て得ぬ世を春霞常にもかま宿の明ほの

古郷桃

115 荒すてゝ中く里は仙人の住居にしむる桃菌の春

池杜若

116 池水に誰かうつしてかかきつはた筆も及はぬ花の色哉

款冬露

117 をのつからうつるはかりを置露の色くらへする山吹の

花

山路藤

118 心にやはいまとひけん藤の花折てかへさも惜き山路は

暮春興 一 (10才)

119 移ろひぬはゝそ董の岡つゝしなにの色にも惜き春かな

閏三月尽

120 一月のくはゝるも只夢の間の春の名残は遠の夕くれ

夏十五首

首夏

121 霞しもかはらさりけり夏木立緑にくもるあけほのゝ山

卯花盛

122 時しらぬ雪やあらぬと夕暮の籬を山にさける卯花

新樹雨

123 花ならぬ匂ひも風のをつから梅の若葉にかゝる村雨

待時鳥

124 郭公あはれと知や待わひてぬる夜の夢に声通ふらん

郭公遠 一 (10ウ)

125 雲深き山時鳥一声におもへはとをき明ほのゝ空

菖蒲

126 やり水に茂るあやめも空焼の吹まかへたるこすの下風

夜廬橘

127 小夜まくら花たち花やしるへせしみし世に似たる夢の

通路

五月雨

128 さひしさを問もあやなし五月雨のふるき友さへうとき

宿りに

常夏

129 いっはともわかれぬ色をそふる哉夕露しめるとこ夏の

はな

蛭似露

130 暮ぬれはしけぬく露の光より蛭をわくるあしの上かせ

夏草

131 そことなく茂る夏のゝ深ければ花みむとてやま草茹ら

ん 一 (11才)

夏月

132 すかりある露の若竹打なひきうつるもよはき窓の月影

鵜河

133 みな底も照らすかゝりの鵜飼舟思ひなつきそ後の闇路

を

閨扇

134 手にふるゝ扇も今はいねかてのさよの心にかよふ秋か

な

納涼

135 夕暮の汀かくろふ川波の音も末野に近き秋かせ

秋二十首

立秋暁

136 みそきせし夜深く夏やいぬかみのとこの山風秋を告也

七夕

137 しほりこし袖はほす共七夕の今夜の露のひまなかるら

むー(11ウ)

籬萩

138 所せくなかめぬる哉萩か花心をそへてむすふまかきに

夜萩

139 秋風の吹ちらす露に置かへて萩の上葉に夢そ残れる

女郎花

140 紅の花よりも猶をみなへし人の心を色にそむらん

薄露

141 ほに出る秋の思ひ〇玉なれや薄の糸にかゝるしら露

夕月

142 山端に夕ゐる雲もをのつから秋にうつるふ月の色かな

友月

143 ともにみし人の心のいくめぐりかはるにも似ぬ宿の月

かな

暁月ー(12オ)

144 一きはの名残も空にすむ月は暁やみのさかひなりけり

沢鳴

145 さひしさにたへぬる身こそ悲しけれ野沢の鳴も立てい

ぬめり

野鶉

146 浜風に床あれぬとや鶉鳴夕さひしき真野の萱はら

初雁

147 秋風もしはしとゝめよあかなくに雁かね過る雲のかよ

ひ路

岡鹿

148 折しもや岡辺の葛葉吹風も身にしられてや鹿の鳴らん

秋夕

149 心そとはらふに猶も思はれて身を離ぬ秋の夕くれ

葛紅葉

150 世中の時しらぬ谷の常磐木を秋にいさなふ葛の色かな

― (12ウ)

菊盛

151 待得たる心をそへて八重菊のかさねも色もふかき庭か

な

擣衣

152 きゝつたふ誰さ夜衣恨なき身にも思ひをうちつけの声

紅葉深

153 むらゝ〇にわきし時雨もをしなへて紅葉の山に埋れに

けり

暮秋

154 いっしかも虫のねうすき浅茅生に霜のけしきを結ふ露

かな

閏九月尽

155 長月に又長月を重ねしもおしむにたらぬけふの暮哉

冬十五首

初冬

156 うつりきぬ此比秋の山かせも冬たつ雲はあかしたつな

り ― (13オ)

落葉

157 山の秋はつれなき名にし立田河落て紅葉や心つくらむ

夕時雨

158 いつも聞雨も時雨の神無月身にしめとてや夕暮の空

枯野

159 吹とみえて朽葉かたよる山風にしはし枯野の声もなつ

かし

朝霜

160 ねくら出る鳥も翅やぬるむらん枯葉をたつる霜の煙に

竹霰

161 いくより声は出つらん風のうちに霰を告る窓の呉竹

岡雪

162 幾里の向ひの岡もめ路晴て今朝は隣の庭のしら雪

閑庭雪 「(13ウ)

163 つくくとなかむる色や遠山の白妙ならぬ庭の雪かな

残雁

164 とけてねぬ夜寒やさそふ冬されの月も南にわたる雁か

ね

池氷

165 水鳥も猶広沢の池の面に浪や氷を敷余すらむ

鷹狩

166 はしたかのせめ行鈴にふりそへてつかれの犬のかせきをそ聞

をそ聞

炭竈

167 みそれする風に煙は横おれて雲をそたつるを野の炭か

ま

爐火

168 夢路さへ氷はてけり長きよををきみて明す埋火のもと

寒梅

169 春を待思ひ内にやあまるらむ雪の園よりかほる梅か香

「(14オ)

除夜

170 過うしといふ一年も一夜のみ何なす年の月日なるらん

恋十五首

未洩恋

171 思ひつゝ心にこむる日比へてもれはけしきを問人もか

な

逐日増恋

172 大かたに思ひ過にし月日さへあやしき迄に成にける哉

名立恋

173 あなかりにつゝむけしきの折くや心つけつゝ人のみ

るらん

片思恋

174 夕風のかたむすひにもさそはなむくゆ計なる胸の煙を

互忍恋

175 あひ思ふかひこそなけれ独つゝ人目よくとて遠さかり

ぬる 「(14ウ)

通書恋

176 言葉の跡こそなけれ水くきのかきなかしては淵と成な

ん

連夜恋

177 はかなしやなくさめのみの契かな今夜もおなし明日の夕を

契待恋

178 逅(ワクラバ)にいつはりならぬ夕たに我とさはりをなと思ふらん

始逢恋

179 涙さへ思ひまとひて落ぬらむ逢夜は何の心なき身に

夜深帰恋

180 来ても猶つらき心や有明の月を夜床にをきて行らむ

依恋祈身

181 恨ては身をこそ祈れ絶而さも人に有ける心と思へは

賤被厭恋 「(15オ)

182 をとしむる思ひのつま木こりすまのあまりに恥す恋わたる哉

恋不依人

183 みせはやな下はふ葛もなひくえのあれは梢にかゝるな

らひを

契二世恋

184 面影もかはらてあれな後の世とかくる契の尽しと思ふに

誓行末恋

185 替らしとたつる誓の行末を名たゝる神の忘すもかな  
雑十五首

暁雲

186 暁のうさをもしらて帰らむうら山しくも嶺の白雲

夕鐘

187 なかめつゝ哀消行鐘のおとに煙そ残る山もとの暮

夜雨 「(15ウ)

188 誰に又何と語らんね覚して小夜も更行雨の心を

旅行友

189 悔しくもかへりみらるゝ山路かなかたらふ友の心弱さに

旅泊夢

190 舟よする和田の入江の梶枕もろこし迄もかよふ夢哉

無常

191 うこかしと何思ひけむ石の火の影計なる世のたのしみを

懐旧

192 わひぬれは忘かねぬるいにしへをおこれは人のかへり

みもなき

述懐

193 あきらかに聞人有てかたらはやへつらふ世にはことほりもなし

思往事

194 時の間もはかなやあたに送る哉過し計は過難きよを

「(16才)

空観

195 たとへても何を浮世はありそ海のありとみるく波のうたかた

釈教

196 其まゝの色に迷ひて様く手折や法の花の一枝

幽居

197 花さけはさすか時しる住居哉なかに埋る此身なれとも

江村

198 なかめ合て思ふもさひし夕波の入江隔つる蘆のかり庵

仙家竹

199 をのゝえをくたすもしらし深緑夏冬わかて千尋ある陰

社頭松

200 絶せしと兼てや植し神垣にふりぬる松の世々のことの

葉「(17ウ)

(小山順子 本学教授)

(大石華央 本学大学院博士前期課程)

(土井萌菜 本学大学院博士前期課程)

(東野空 龍谷大学大学院博士後期課程)

(古川彩佳 本学大学院博士前期課程)